

【 復活のトロパリ 第7調 】



ハスト スか み よ、なんぢ はじゅう じ か に て し を  
神 爾 十 字 架 死

ほ ろ ぼ し、と う ぞ く の た め に ら く えん を ひ  
滅 盗 賊 の 爲 樂 園 開

ら き、け い こ う ぢ ょ の か な し み を な ぐ さ  
攜 香 女 悲 慰

め、し と に なん ぢ が ふ く か つ し て、せ か  
使 徒 爾 復 活 世 界

い に お お い な る あ わ れ み を た ま い し を つ た え  
大 憐 賜 傳

さ せ た ま え り。  
給

【 日本の亜使徒聖ニコライのトロパリ 第4調 】



し と と ひ と し く ど う ざ な る も の、ちゅう  
使 徒 等 同 座 者 忠

じ つ に し て しん ち な る ハスト スの え き しゃ、せ い  
實 神 智 役 者 聖

な る しん に え ら ば れ た る ふ え、ハスト スの あ い  
神 撰 笛 愛

に み ち た る う つ わ、わ が く に の こ う  
満 器 我 國 光

しょ う しゃ、あ し と し ゆ き ょ う せ い ニ コ ラ イ  
照 者 亜 使 徒 主 教 聖

よ、なんぢのぼくぐんのため、および  
爾羊群た爲お及

ぜんせかいのたために、いのちをたもうせい  
全世界た爲生ち命賜うせ聖

さんしゃにいのりたまえ。  
三者祈給え。

【 日本の亜使徒聖ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにき  
光栄父子と聖いしんにき  
す、

せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが  
成聖者亞使徒聖我

くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ  
國爾旅人及異邦人受

しに、なんぢははじめわがくににおいておの  
爾は初我國お於己

れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストの  
外來者知れども、ハリストの

ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて  
光暖かき流爾敵

きをぞくしんのことな爲し、かれらにか  
屬神子た爲し、かれらにか



みのおんちょうをあたえ、ハリストのきょうかいをたて  
 恩寵 與 教 會 建  
 たり、いまこのきょうかいのためにより  
 今 此 教 會 爲 祈  
 たまえ、けだしわれらそのしよしはなん  
 給 蓋 我 等 其 諸 子 爾  
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ  
 呼 我 善 牧 者 慶  
 べよ。

【 復活のコンダク 第7調 】



いまもいつもよよに、アミン。  
 今 何 時 世 世  
 しのけんはすでにひとびとをとらうるあた  
 死 權 已 人 人 捕 能  
 わず、けだしハリストはくだりてそのち力  
 蓋 降  
 からをやぶりてほろぼしたまえり。ぢご  
 敗 滅 給 地 獄  
 くはしばられ、よげんしゃはどうしんによろ  
 縛 預 言 者 同 心 喜  
 こびてよぶ、きゅうせいしゅはしんにおる  
 呼 救 世 主 信 居




司祭) ( 黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、  
ヘルヴィムより讃榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有  
となし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾  
り、願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に  
痛悔を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が  
聖なる祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讃榮を奉るに堪うる  
ものとなしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の  
仁慈を以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈  
と體とを聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖  
なる生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、 )

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世  
に、



# 【 聖三祝文 】





よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい  
 なるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 めよ。こうえいはちちとことせいしん  
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。  
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわれ  
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆう  
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを  
 あわれめよ。

司祭) ( 黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、 )

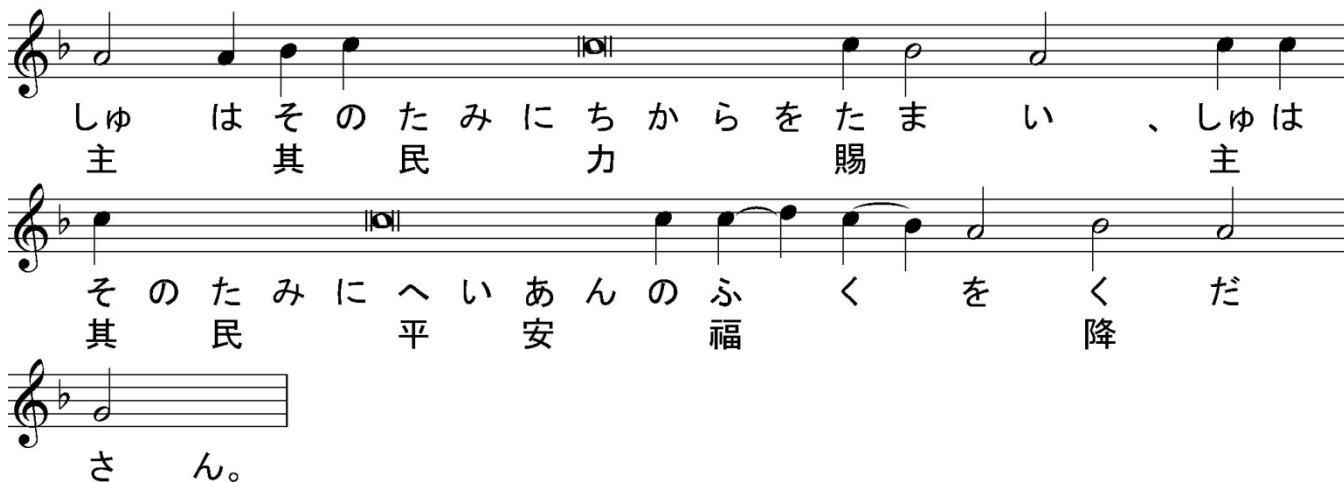
【 プロキメン 提綱 主日第7調 】

司祭) つつし き しゅうじん へいあん  
 慎みて聽くべし、衆人に平安、

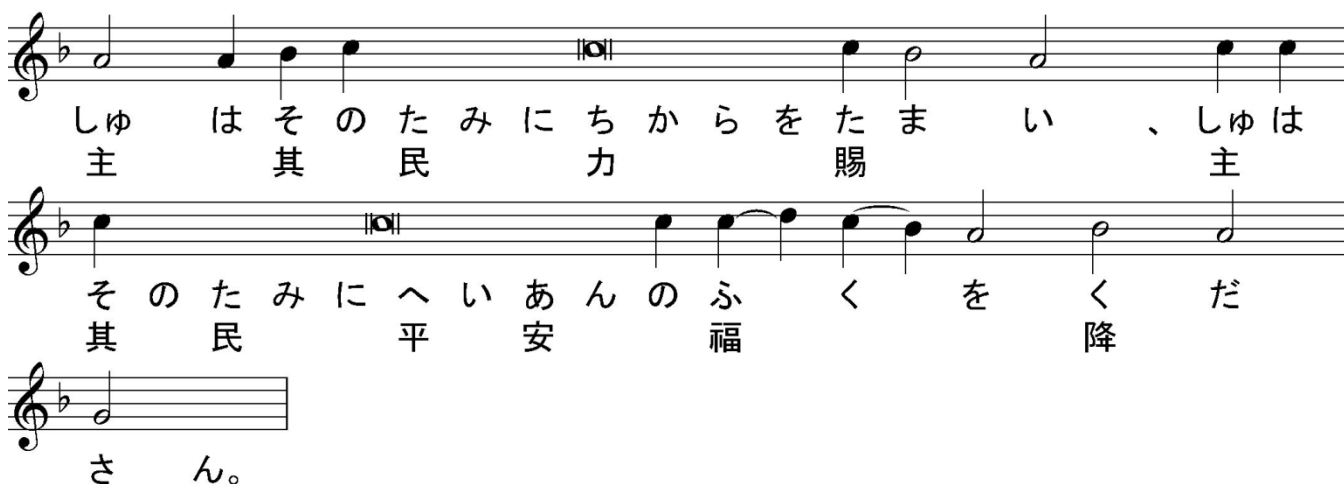
誦經) なんぢ しん  
爾の神にも、

司祭) えいち  
睿智、

誦經) しゅ そのたみ ちから たま しゅ そのたみ へいあん ふく くだ  
プロキメン、主は其民に力を賜い、主は其民に平安の福を降さん、



誦經) かみ しよし しゅ けん こうえい せんき しゅ けん  
神の諸子よ、主に獻ぜよ、光榮と尊貴とを主に獻ぜよ、



誦經) しゅ そのたみ ちから たま  
主は其民に力を賜い、



【 アポストロス 使徒經 221 端 エフェス書2章14節～22節 】

司祭) えいち  
睿智、

誦經) せいしと じん たつ しよ よみ  
聖使徒パウエルがエフェス人に達する書の讀、



司祭) <sup>つつし</sup> 謹 <sup>き</sup> みて聴くべし、

誦經) <sup>けいてい</sup> 兄 弟 よ、<sup>われら</sup> ハリストスは我等の<sup>わへい</sup> 和平なり、<sup>ふたつ</sup> 二 の者を<sup>ひとつ</sup> 一 と爲し、<sup>な</sup> 隔 の<sup>へだて</sup> 牆を<sup>かき</sup> 毀ち、<sup>こぼ</sup> 己 <sup>おのれ</sup> の<sup>み</sup> 身を<sup>もつ</sup> 以て<sup>あだ</sup> 仇を<sup>はい</sup> 廢し、<sup>おしえ</sup> 教 を<sup>もつ</sup> 以て<sup>しょかい</sup> 諸 誠の<sup>りっぼう</sup> 律 法を<sup>はい</sup> 廢せり、<sup>こ</sup> 是れ<sup>わへい</sup> 和平を<sup>な</sup> 爲して、<sup>ふたつ</sup> 二 の<sup>もの</sup> 者を<sup>もつ</sup> 以て、<sup>おのれ</sup> 己 に<sup>おい</sup> 於て、<sup>ひとつ</sup> 一 の<sup>あらた</sup> 新 なる<sup>ひと</sup> 人を<sup>つく</sup> 造り、<sup>またじゅうじか</sup> 又 十 字<sup>あだ</sup> 架にて<sup>ころ</sup> 仇を<sup>これ</sup> 殺し、<sup>もつ</sup> 此 を<sup>もつ</sup> 以て、<sup>ひとつ</sup> 一 の<sup>み</sup> 身に<sup>おい</sup> 於て、<sup>ふたつ</sup> 二 の<sup>もの</sup> 者を<sup>かみ</sup> 神と<sup>ふくわ</sup> 復 和せ<sup>ため</sup> しめ<sup>かつきた</sup> ん 爲<sup>なんぢらとお</sup> なり。且 <sup>もの</sup> 來<sup>ちち</sup> りて、<sup>わへい</sup> 爾 等<sup>ふくいん</sup> 遠<sup>けだしけれ</sup> き者<sup>よ</sup> に<sup>われらふたつ</sup> 和平を<sup>もの</sup> 福 音<sup>ひとつ</sup> せり、<sup>しん</sup> 蓋 <sup>あ</sup> 彼<sup>ちち</sup> に<sup>ちか</sup> 由<sup>ちか</sup> りて、<sup>あ</sup> 我等 <sup>ちち</sup> 二 の<sup>ちか</sup> 者は、<sup>あ</sup> 一 の<sup>ちち</sup> 神<sup>ちか</sup> に<sup>ちか</sup> 在<sup>ちか</sup> りて、<sup>ちか</sup> 父<sup>ちか</sup> に<sup>ちか</sup> 近<sup>ちか</sup> づく<sup>ちか</sup> を<sup>ちか</sup> 得<sup>ちか</sup> る<sup>ちか</sup> なり。故<sup>ちか</sup> に <sup>ちか</sup> 爾 等<sup>ちか</sup> 既<sup>ちか</sup> に<sup>ちか</sup> 異<sup>ちか</sup> 民<sup>ちか</sup> 、<sup>ちか</sup> 或 <sup>ちか</sup> は<sup>ちか</sup> 他<sup>ちか</sup> 邦<sup>ちか</sup> の<sup>ちか</sup> 人<sup>ちか</sup> たら<sup>ちか</sup> ず、<sup>ちか</sup> 乃 <sup>ちか</sup> 諸 <sup>ちか</sup> 聖<sup>ちか</sup> 徒<sup>ちか</sup> の<sup>ちか</sup> 同<sup>ちか</sup> 邦<sup>ちか</sup> の<sup>ちか</sup> 人<sup>ちか</sup> 、  
<sup>かみ</sup> 神<sup>かみ</sup> の<sup>かみ</sup> 家<sup>かみ</sup> 屬<sup>かみ</sup> なり、<sup>なんぢら</sup> 爾 等<sup>なんぢら</sup> は<sup>なんぢら</sup> 諸<sup>なんぢら</sup> 使<sup>なんぢら</sup> 徒<sup>なんぢら</sup> と<sup>なんぢら</sup> 諸<sup>なんぢら</sup> 預<sup>なんぢら</sup> 言<sup>なんぢら</sup> 者<sup>なんぢら</sup> との<sup>なんぢら</sup> 基<sup>なんぢら</sup> に<sup>なんぢら</sup> 建<sup>なんぢら</sup> て<sup>なんぢら</sup> ら<sup>なんぢら</sup> れ<sup>なんぢら</sup> たり、<sup>なんぢら</sup> イ<sup>なんぢら</sup> ス<sup>なんぢら</sup> ス<sup>なんぢら</sup> ・<sup>なんぢら</sup> ハ<sup>なんぢら</sup> リ<sup>なんぢら</sup> ス<sup>なんぢら</sup> ト<sup>なんぢら</sup> ス<sup>なんぢら</sup> は<sup>なんぢら</sup> 自<sup>なんぢら</sup> ら<sup>なんぢら</sup> 其<sup>なんぢら</sup> 隅<sup>なんぢら</sup> 石<sup>なんぢら</sup> なり。此<sup>なんぢら</sup> の<sup>なんぢら</sup> 上<sup>なんぢら</sup> に<sup>なんぢら</sup> 全<sup>なんぢら</sup> 屋<sup>なんぢら</sup> は<sup>なんぢら</sup> 組<sup>なんぢら</sup> み<sup>なんぢら</sup> 立<sup>なんぢら</sup> て<sup>なんぢら</sup> ら<sup>なんぢら</sup> れ<sup>なんぢら</sup> 、<sup>なんぢら</sup> 次<sup>なんぢら</sup> 第<sup>なんぢら</sup> に<sup>なんぢら</sup> 築<sup>なんぢら</sup> き<sup>なんぢら</sup> て、<sup>なんぢら</sup> 主<sup>なんぢら</sup> に<sup>なんぢら</sup> 於<sup>なんぢら</sup> ける<sup>なんぢら</sup> 聖<sup>なんぢら</sup> 殿<sup>なんぢら</sup> と<sup>なんぢら</sup> 爲<sup>なんぢら</sup> る、<sup>なんぢら</sup> 此<sup>なんぢら</sup> の<sup>なんぢら</sup> 上<sup>なんぢら</sup> に<sup>なんぢら</sup> 爾 等<sup>なんぢら</sup> も、<sup>なんぢら</sup> 神<sup>なんぢら</sup> に<sup>なんぢら</sup> 由<sup>なんぢら</sup> りて、<sup>なんぢら</sup> 神<sup>なんぢら</sup> の<sup>なんぢら</sup> 居<sup>なんぢら</sup> 處<sup>なんぢら</sup> と<sup>なんぢら</sup> して、<sup>なんぢら</sup> 共<sup>なんぢら</sup> に<sup>なんぢら</sup> 建<sup>なんぢら</sup> て<sup>なんぢら</sup> ら<sup>なんぢら</sup> る<sup>なんぢら</sup> なり。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) キリストはわたしたちの平和であって、二つのものを一つにし、敵意という隔ての中垣を取り除き、ご自分の肉によって、数々の規定から成っている戒めの律法を廃棄したのである。それは、彼にあって、二つのものをひとりの新しい人に造りかえて平和をきたらせ、十字架によって、二つのものを一つのからだとして神と和解させ、敵意を十字架にかけて滅ぼしてしまったのである。それから彼は、こられた上で、遠く離れているあなたがたに平和を宣べ伝え、また近くにいる者たちにも平和を宣べ伝えられたのである。というのは、彼によって、わたしたち両方の者が一つの御霊の中にある、父のみもとに近づくことができるからである。そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族なのである。またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある聖なる宮に成長し、そしてあなたがたも、主にある共に建てられて、霊なる神のすまいとなるのである。

\*\*\*\*\*

### 【 アリルイヤ 主日第7調 】

司祭) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>へいあん</sup> に 平 安、

誦經) <sup>なんぢ</sup> 爾 <sup>しん</sup> の 神 にも、

司祭) <sup>えいち</sup> 睿 智、

誦經) アリルイヤ、





誦經) <sup>しじょうしゃ</sup>至 <sup>しゅ</sup>上 <sup>さんえい</sup>者よ、主を讃 <sup>なんぢ</sup>榮 <sup>な</sup>し、爾 <sup>うた</sup>の名に歌 <sup>び</sup>うは美 <sup>かな</sup>なる哉、



誦經) <sup>なんぢ</sup>爾 <sup>あわれみ</sup>の <sup>あさ</sup>憐 <sup>の</sup>を朝に宣 <sup>なんぢ</sup>べ、爾 <sup>まこと</sup>の <sup>よ</sup>眞 <sup>の</sup>を夜に宣 <sup>び</sup>ぶるは美 <sup>かな</sup>なる哉、



司祭) ( 黙誦: <sup>ひと</sup>人 <sup>あい</sup>を愛 <sup>しゅさい</sup>する主 <sup>わ</sup>宰 <sup>こころ</sup>よ、我 <sup>かみ</sup>が <sup>し</sup>心 <sup>ちえ</sup>に神 <sup>いさぎよ</sup>を知 <sup>ひかり</sup>る智 <sup>かがや</sup>慧 <sup>わ</sup>の <sup>しねん</sup>淨 <sup>わ</sup>き <sup>しねん</sup>光 <sup>わ</sup>を輝 <sup>しねん</sup>かし、我 <sup>しねん</sup>が思 <sup>しねん</sup>念 <sup>しねん</sup>を

<sup>め</sup>の <sup>ひら</sup>目 <sup>なんぢ</sup>を啓 <sup>ふくいん</sup>きて、爾 <sup>おしえ</sup>が福 <sup>さと</sup>音 <sup>たま</sup>の <sup>わ</sup>教 <sup>うち</sup>を悟 <sup>なんぢ</sup>らしめ給 <sup>ふく</sup>え、我 <sup>いましめ</sup>が衷 <sup>いましめ</sup>に爾 <sup>いましめ</sup>の福 <sup>いましめ</sup>たる <sup>いましめ</sup>誠 <sup>いましめ</sup>を

<sup>おそ</sup>畏 <sup>おそれ</sup>る <sup>い</sup>畏 <sup>われら</sup>をも入 <sup>ことごと</sup>れて、我 <sup>にくたい</sup>等 <sup>よく</sup>が <sup>ふ</sup>悉 <sup>およ</sup>くの肉 <sup>なんぢ</sup>體 <sup>よろこ</sup>の慾 <sup>ところ</sup>を踏 <sup>ところ</sup>み、凡 <sup>ところ</sup>そ <sup>ところ</sup>爾 <sup>ところ</sup>の喜 <sup>ところ</sup>ぶ <sup>ところ</sup>所 <sup>ところ</sup>

<sup>おも</sup>を <sup>か</sup>思 <sup>おこな</sup>い且 <sup>ぞくしん</sup>つ <sup>せいかつ</sup>行 <sup>す</sup>いて、屬 <sup>いた</sup>神 <sup>たま</sup>の生 <sup>けだし</sup>活 <sup>かみ</sup>を過 <sup>かみ</sup>ぐるを致 <sup>かみ</sup>させ給 <sup>かみ</sup>え、蓋 <sup>かみ</sup>ハリス <sup>かみ</sup>トス神 <sup>かみ</sup>よ、

<sup>なんぢ</sup>爾 <sup>わ</sup>は我 <sup>たましい</sup>が <sup>からだ</sup>靈 <sup>こうしょう</sup>と <sup>われらなんぢ</sup>體 <sup>なんぢ</sup>との光 <sup>むげん</sup>照 <sup>ちち</sup>なり、我 <sup>しせいしぜん</sup>等 <sup>しせいしぜん</sup>爾 <sup>しせいしぜん</sup>と <sup>しせいしぜん</sup>爾 <sup>しせいしぜん</sup>の無 <sup>しせいしぜん</sup>原 <sup>しせいしぜん</sup>の父 <sup>しせいしぜん</sup>と至 <sup>しせいしぜん</sup>聖 <sup>しせいしぜん</sup>至 <sup>しせいしぜん</sup>善 <sup>しせいしぜん</sup>にし

<sup>いのち</sup>て <sup>ほどこ</sup>生命 <sup>なんぢ</sup>を <sup>しん</sup>施 <sup>こうえい</sup>す <sup>けん</sup>爾 <sup>いま</sup>の神 <sup>いつ</sup>とに光 <sup>よよ</sup>榮 <sup>よよ</sup>を獻 <sup>よよ</sup>ず、今 <sup>よよ</sup>も何 <sup>よよ</sup>時 <sup>よよ</sup>も世 <sup>よよ</sup>世 <sup>よよ</sup>に、ア <sup>よよ</sup>ミ <sup>よよ</sup>ン。 )

【 エヴァンゲリオン 福音經 ルカ福音書 53 端 10 章 25～37 節 】

司祭) <sup>えいち</sup>睿 <sup>つつし</sup>智 <sup>た</sup>、肅 <sup>せいふくいんけい</sup>みて立 <sup>き</sup>て聖 <sup>しゅうじん</sup>福 <sup>へいあん</sup>音 <sup>へいあん</sup>經 <sup>へいあん</sup>を聴 <sup>へいあん</sup>くべし、衆 <sup>へいあん</sup>人 <sup>へいあん</sup>に平 <sup>へいあん</sup>安 <sup>へいあん</sup>、



司祭) <sup>でん</sup>ル <sup>せいふくいんけい</sup>カ <sup>よみ</sup>傳 <sup>よみ</sup>の聖 <sup>よみ</sup>福 <sup>よみ</sup>音 <sup>よみ</sup>經 <sup>よみ</sup>の讀 <sup>よみ</sup>、





司祭) つつし き か とときひとり りっぽうし つ かれ こころ い し  
謹みて聴くべし、彼の時一の律法師イイスに就きて、彼を試みて曰えり、師よ、

われなに な えいえん いのち つ かれ これ い りっぽう なに しる なんぢいか  
我何を爲して永遠の生命を嗣がんか。彼は之に謂えり、律法に何をか録せる、爾如何

よ こた い なんぢこころ つく たましい つく ちから つく おもい つく しゅ  
に読むか。答えて曰えり、爾心を盡し、霊を盡し、力を盡し、意を盡して、主

なんぢ かみ あい またなんぢ となり あい おのれ ごと これ い  
爾の神を愛せよ、又爾の隣を愛すること、己の如くせよ。イイス之に謂えり、

なんぢ こた ところただ これ な すなわち い しか かれ おのれ ぎ ほつ  
爾の答えし所正し、之を爲せ、乃生きん。然れども彼は己を義とせんと欲して、

い わ となり だれ こた い あるひと  
イイスに謂えり、我が隣とは誰ぞや。イイス答えて曰えり、或人エルサリムよりイエ

くだ ととき ぬすびと あ かれらそのころも は かれ きず ほん し  
リホンに下る時、盜賊に遇へり、彼等其衣を剥ぎ、彼に傷つけ、幾ど死するばかりに

かれ す さ たまたまひとり さいこ みち くだ かれ み す さ おな  
して、彼を捨て去れり。適一の司祭是の路より下りしが、彼を見て、過ぎ去れり。同

かしこ いた ちか かれ み す さ ただある じん ゆ ここ  
じくレヴィトも彼処に至り、近づきて彼を見て、過ぎ去れり。惟或サマリヤ人は行きて、此

いた かれ み あわれ つ そのきず あぶら さけ そそ これ つつ かれ おのれ か  
に至り、彼を見て憫み、就きて、其傷に油と酒とを沃ぎて、之を裹み、彼を己の家

ちく の りよかん ひ いた かれ かんご あくるひゆ とき ぎんにまい いた  
畜に乗せ、旅館に引き至りて、彼を看護せり。明日行かんとする時、銀二枚を出し、

あるじ あた これ い こ ひと かんご ついえも これ ま われかえ ときなんぢ  
館主に與えて、之に謂えり、此の人を看護せよ、費若し之より益さば、我返る時爾に

つくの こ さんにん うち なんぢいづれ ぬすびと あ もの となり おも かれい こ ひと  
償わん。此の三人の中、爾孰を盜賊に遇いし者の隣と意うか。彼曰えり、此の人

あわれみ ほどこ もの かれ い ゆ なんぢ か ごと おこな  
に矜恤を施しし者なり。イイス彼に謂えり、往きて、爾も是くの如く行え。

\*\*\*\*\*

(比較用 口語訳) ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った、「先生、何をしたら永遠の生命が受けられましようか」。彼に言われた、「律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか」。彼は答えて言った、『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』。また、『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります。彼に言われた、「あなたの答は正しい。そのとおり行いなさい。そうすれば、いのちが得られる」。すると彼は自分の立場を弁護しようと思って、イエスに言った、「では、わたしの隣り人とはだれのことですか」。イエスが答えて言われた、「ある人がエルサレムからエリコに下って行く途中、強盗どもが彼を襲い、その着物をはぎ取り、傷を負わせ、半殺しにしたまま、逃げ去った。するとたまたま、ひとりの祭司がその道を下ってきたが、この人を見ると、向こう側を通って行った。同様に、レビ人もこの場所にさしかかってきたが、彼を見ると向こう側を通って行った。ところが、あるサマリヤ人が旅をしてこの人のところを通りかかり、彼

を見て気の毒に思い、近寄ってきてその傷にオリーブ油とぶどう酒とを注いでほしいをしてやり、自分の家畜に乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。翌日、デナリ二つを取り出して宿屋の主人に手渡し、『この人を見てやってください。費用がよけいにかかったら、帰りがけに、わたしが支払います』と言った。この三人のうち、だれが強盗に襲われた人の隣り人になったと思うか」。彼が言った、「その人に慈悲深い行いをした人です」。そこでイエスは言われた、「あなたも行って同じようにしなさい」。

\*\*\*\*\*

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえいはなんぢにきす。

主 光 栄 爾 歸 爾 歸

※ 聖体礼儀③（金ロイオアン）へ